

蘇れ海の幸

日本の資源管理最前線

不安と向き合い前進へ



Powered By
EDF

＝ ⑧ ＝

姿を消し、16年以降は禁漁が続く。15年の春漁でも親魚を残していたことも翌年以降禁漁していることから、乱獲ではなくなる魚もいる。例えば自然現象で大量死したとみられ、原因として「水温上昇が疑われる」道へ、サワラが山形や青森へ北上し始め、新たな漁獲物として定着。人気を集めるようにな

これまで、漁業を適度に管理し、水産資源を増やしていく道を考えてきた。だが、漁業管理は水産業を守り成長させる方法の一つにすぎない。【不安の資源管理だけ大丈夫か】

例えば、漁獲を抑えるだけで対応できない環境問題。取材中も「温暖化で資源に影響が出ている」

（石狩湾漁協）、「黒潮の大蛇行からか、藻場が衰退してイセエビの餌場がなくなるのではないかと心配」（三重外湾漁協和心配）（三重外湾漁協和心配）

（石狩湾漁協）、「黒潮の大蛇行からか、藻場が衰退してイセエビの餌場がなくなるのではないかと心配」（三重外湾漁協和心配）（三重外湾漁協和心配）

やらぬ理由より今できることを

浜ごとで将来描き水産復興

気候変動による資源への影響は大きな不安材料だ。水産研究・教育機構によると、日本近海のスルメイカ資源の激減も、15～16年の水温条件の悪さが引き金となっ

変化対応にICT

環境変化に対応するために、原因と対策方法の整理が大切になる。沖縄では、漁協の主導で県の

「やらぬ理由」ではなく、「今できること」を、関係者は前向きに浜と資源の将来を話し合っている。おわり



魚種を記録し漁獲予想に役立てるゲイト

漁獲予想は、観光客を漁業体験に誘致することにも有効だ。激減したスルメイカは今違法・無規制(IUU)漁業の追い打ちを受けているとみられる。IUU漁船の動きをつかむため、人工衛星などから監視する取り組みも進行中。取り組みには日本の水産研究教育機構に加え、米国のIUU漁業を疑われる船や国を特定し、輸出入規制などの対策を取れる可能性もある。

また、ICTは資源や環境以外の面からも水産経営に役立つ。漁場や漁獲を予想できれば、熟練のICCT大手グループの出やすい。漁業者の人手不足や燃油の浪費も解消しやすい。

この海域でどんな魚が獲れそうか精度よく予測する技術は開発されつつある。また、ICTは資源や環境以外の面からも水産経営に役立つ。漁場や漁獲を予想できれば、熟練のICCT大手グループの出やすい。漁業者の人手不足や燃油の浪費も解消しやすい。

て対策を求めた例がある。対策をスムーズにするため、将来を予測する情報通信技術(ICT)の開発も進んでいる。例えば、速報できれば、獲った魚をより需要のある地域や加工場のある漁港に揚げに行きやすい。漁業者と水産加工場が連携を強めれば、商品開発やPR目指す未来は違わずらう。一体どんな未来を望むか、浜ごとで話し合う

必要になる。この連載のメンバーである非営利団体エンパイロメンタル・デフエンス・ファンズ(EDF)海洋部門の大家和彦日本代表は「津々浦々の先進事例は、未来志向で水産日本復興を」と呼び掛けている。

（東京支社・太田毅人）



遠隔魚探で出航前から漁獲を予想する早田大敷

